

ブラジル発展に尽くす 日本青年の移住を。

～日系移住者の願い～



3世、孫の誕生日



林 寿雄
(ブラジル サンパウロ市在住)

ブラジルの邦人社会では、今「おしんブーム」でもちきりです。やはり一世自らの体験がおしんの姿に重なるのでしょう。ビデオができてからは、ブラジルにいても、日本の茶の間と同じテレビを見られるようになっていきます。世の中も便利になったものです。

私は今から五十三年前(昭和六年)日本カ行会を卒業して、ひとり大きな希望を胸に抱いて渡伯しました。最初の十年間は日本語学校の教師をしましたが、生活が安定すると、写真館経営を皮切りに事業を始め、文房具、雑貨の百貨店経営にこぎつきました。これは、今も「ロージャス日本」として続いています。その間、息子たちと建築、不動産の仕事も始め、現在はアパート建築などが本業となっています。ほかに私設サッカー場、健康サウナ業も経営しています。

最近はおつばら社会活動に力を入れています。まず、私が卒業したカ行会に恩返しといった意味もあって、ブラジルカ行会の会長を十五年続けています。カ行会は、日本に本部をもつ海外発展の意気に溢れた者の集団ですが、



サンパウロ学生会アルモニア
学生寮30周年記念祭
(オペリスクの前に来賓者たち...)

アルモニア
校からこよりを出さず

ブラジル社会でも大活躍で、会員の中に幾人もの県人会長を輩出しており、地方自治体の長として活躍している人もいます。

り、今年ちよど百人目を送り出しました。我々コロンヤ(移住者の世界では、老人間にゲートボールがスポーツとして流行していますが、これも日本の社会と一緒のようですね。若い二世、三世はどうしても国技であるフットボール熱が盛んなようです。だんだん、移住の歴史も長くなると、日系移住者の後継者問題が大きくなるのしかかっています。後継者が途絶えた現在、何とか打開策を講ぜねばと思っています。

意気投合しました。ブラジルの日系移住者は、七十年の歴史があり、今や七十万の人口を擁しますが、ブラジル全体一億の人口の中ではまだ粟粒くらゐの存在です。現在のように後継者が途絶えていては、山田長政の二の舞にならないとも限りません。今ほど日本から有為の青年の移住を切望する時はありません。ただ昔と違って、今後ブラジルに移住する青年は、己一身の栄達を望むより、ブラジルの発展に心から協力できる青年であって欲しいものです。

50年前、チエテ移住地に日本人技師によってかけられた橋

私の1000字提言

健康は、 一人ひとりの責任。



熊本女子大学助教授
重松 三和子

ドクター・クーパーが一九六八年に「エアロビクス」を世に出して以来、全世界にエアロビクス健康ブームが巻き起こった。エアロビクスとは、直訳すれば「有酸素運動」の意味で、体内に多くの酸素を取り込みながら、心臓、肺の機能を強化し、全身の持久性を増していくというトレーニングである。

その取り組み(エアロビクス・エクササイズ)としては、歩く、軽く走る(ジョギング)、走る、泳ぐ、サイクリングなどが代表的なものとしてあげられる。運動の強さと持続時間ももとに運動量を点数化し、健康の維持には週最低三十点必要と結論づけている点に、分かりやすさと斬新さがある。ちなみに、一マイル(一・六キロ)を十四分三十秒、十九分五十九秒で歩けば一点、八分、九分五十九秒で走れば四点取れる計算である。いわゆる「エアロビクスダンス」もエアロビクス・エクササイズの一部であり、レコード一曲(約五分)リズムカルに汗を流し、心拍数を上げると一・五〜二点になる。

熊本女子大学の体育研究室では、毎年婦人を対象にスポーツ教室を開設し、おぼん症候群を気にしながら集まった人々と、エアロビクスの理論と実技を勉強している。この教室では、酸素を十分に取り込んだ運動後の爽快さと満足感を味わい、「若々しく健康な日々」を送るため、一人ひとりの取り組みを「他人に頼らず」「自分で見つける」ことをモットーとしている。

高齢化社会に向かって、人生八十年をいかに健康で幸福に生きるかは、一人ひとりの責任であり、それは毎日の生活の中にいかに運動を取り入れ実行していくかにかかっていると思う。クーパー夫人は、「女性のための



「エアロビクス」の中で、「体力を貯えておくことはできません。運動は、毎日あるいは一日おきに行うと決心し、そして実行すべきものです。」と述べているが、このことは一番簡単であり、かつ一番難しいことだと思ふ。

熊本県では、昭和五十年より県民総スポーツ運動が展開され、施設、指導者、活動人口等に多くの成果をあげている。本年度は、

- ①自然に親しむスポーツの振興推進
- ②ふれあいのあるスポーツの推進
- ③たくましさ育てるスポーツの促進